

7

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

であらおう



さわやか福祉財団

コロナ禍を乗り越えて、
地域共生社会実現に向け、一緒に前に進みましょう！

いきがい・助け合い サミット in 神奈川

7月31日まで参加お申し込み受付中

開催

2021年 **9月1日(水)・2日(木)**

場所

パシフィコ横浜
(横浜市西区みなとみらい1-1-1)

開催
形式

会場参加、ライブ配信併用
会場参加 **1500名**
オンライン視聴 **3500名**

※新型コロナウイルス感染症の状況により、全面ライブ配信とする場合があります。開催形式は8月1日に最終決定します。

主な
内容

- 全体シンポジウム
- 分科会：第1部から第3部まで34分科会 ※現時点での予定です
- ポスターセッション ● 全体発表会 など

主な
対象

生活支援コーディネーター、協議体構成員、地方自治体、社会福祉協議会、地域包括支援センター等の地域づくり関係者、国、関係機関、NPO・民間団体の関係者等、助け合い・支え合う地域づくりに関係する方、その他関心を持つ一般住民 など

参加費

資 料 代 **2,000円／1人** (会場参加、オンライン視聴とも)
大交流会は中止となりました



2019年「いきがい・助け合いサミット in 大阪」の様子



お問合せ 電話：(03) 5470-7751 (担当・内田)

◎開催情報は、財団ホームページ
でもご案内しています

▶ <https://www.sawayakazaidan.or.jp>

とある言おう

2021年7月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道

子どもの共感力を地域で育もう 清水 肇子

4 連載 厨房男子 聞き手・堀田 力

元国鉄マンは超元気 原澤 益太郎さん

11 さわやか福祉財団の軌跡 真っ直ぐに、30年

寄稿4 思いを持った生活者の視点で住民の心を動かす

熱い志を持ったさわやかインストラクターと

住民主体の地域づくりを共に推進

さわやか福祉財団理事 鶴山 芳子

20 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

共に支え合って20数年。その人らしく暮らせる地域づくりを

NPO法人ほっとあい（宮城県大河原町）

26 「地域助け合い基金」 助成先のご紹介／状況のご報告

31 移住 悪くないですよ 第8回

移住とは、自由。 寺田 幸代さん（岐阜県美濃市）

36 連載 6 老いの暮らしを創る

早めの引っ越し③ 福祉ジャーナリスト 村田 幸子

新しいふれあい社会づくりに向けて

● 新地域支援事業・

助け合いの地域づくり

40 北から南から 各地の動き

● その他の財団の活動 など

43 ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・ご寄付者の皆様のご紹介

45 さわやか活動日記（抄）

③「基金」でご寄付のご案内／④『さあ、やろう』のご紹介

④『さあ、言おう』バックナンバーのご紹介／⑤「助け合い大全'19」のご紹介

⑦みんなの広場／投稿募集／⑧さわやかパートナー・『さあ、言おう』のご案内／表紙絵から

助け合いを広げよう！ 新・ひとりごと ● 村松 泰子

子どもの共感力を地域で育もう

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

前号ではシニアの社会参加について書いたが、今回は子どもの点から提案してみたい。今、子どもが地域社会と関わる環境はどんどん減ってきている。かつては自然にあった地域での多世代の自由なふれあいも、現代では多くが失われてしまった。防犯上の理由であったり、塾やお稽古事が増えていたりと事情は様々あるが、地域みんなで子どもを育むという考えそのものが弱まってしまっている。だからこそ、もう一度意識して地域の環境をつくり上げる必要があるし、そこにはシニアが活躍できる場が多く存在している。

たとえば、子どもの危ない行為に注意したら親からクレームを受けた、逆に子どもが自由に遊んでいた公園が高齢者が仕切って使いづらくなってしまったなど、こうした対立のニュースが報じられる。そうした風潮を変えていくためにも、私たちは、地域で当たり前に子どもたちを育てているいきいきとした活動をしつかりと伝え、広めていきたいと考えている。

地域での人と人との関わりの中で、子どもは自助や共助の力を育んでいく。地域共生社会の

基本にある「多様性」の時代を生きることになる子どもたち。互いの違いを認め合い、受け入れ合う社会に向けて、では、何が重要かというところ、一番は共感力ではなからうか。

日本でも、生き方や働き方、文化や心のあり方など、急速に様々な新しい価値観が生まれている。ただ、価値観が分散するにつれ、自己の主張が他を否定し排除するような動きにもつながり始めている。多様性の広がりには、本来、寛容な社会の源であるはずなのに、今の日本は、ギスギスした、ますます不寛容な社会に向かっていくように思えるのはなぜだろう。いろいろな価値観を自由に発信しているSNS上には、共感の「いいね」が積み上がるが、それらは時に依存的で、意見の異なる他者をつぶすための非難の道具とも化してしまっている。

違いを違いのまま相手を理解して受け入れ合う、そのために必要なものが、本来の共感力である。もちろん相手のためだけではない。そうして認め合う人と人との関係が、自分自身をより幸せに感じさせてくれることになるからだ。

近年、共感についての研究が増えてきているが、さわやか福祉財団では、次代を担う子どもの共感力、特に未就学の幼児に焦点を当てて、地域との関係を踏まえたモデル研究に取り組んでみることにした。「子どもの共感力を育てるには何が必要か」「そのために地域は何ができるか」。専門家や地域活動の現場の方々のご意見を伺いながら、主に体を動かしながら地域の高齢者等が関われる取り組み、必要な環境等を整理し提案していければと考えている。現場で参考にしてもらう簡単なガイドも作成を予定している。ぜひ、皆さんも一緒に考えていきませんか？ こんな例があるなど情報があればどうぞお知らせください。

厨房男子

聞き手
堀田 力

元国鉄マンは超元氣

連載

原澤 益太郎さん

□ 飲んでる薬はない86歳

軽井沢駅長を務めた元国鉄マン、現在は群馬県高崎市第2層協議体の構成員でもある原澤益太郎さんは、昭和9年生まれ、86歳。私（筆者）と同じ年生まれであるが、あまりに若々しいので圧倒されてしまった。

なにしろ「飲んでる薬は1つもありません」。耳はしっかり聞こえて、言語明瞭、頭の回転高速、1日1万歩あるく日も珍しくない。スマホに便利なアプリを入れて、すすいと使



いこなし（これは当たり前か?）、「1日ボケツとする日は全くありません」

□ 元氣の秘密は好奇心

原澤さんの場合も、元氣の秘密は好奇心であ

った。

本人が「赤ん坊を生むこと以外は何でもできる」と豪語している通り、多芸多趣味である。

「何にでも興味を持つ」をモットーにしている、盆栽歴60年、庭木の手入れや日曜大工、家庭菜園はもちろん、調理師免許を持ち料理の腕は講師級。そして単独旅行に写真などなど。

地域の遺跡や文化財巡りが大好きで、蓄えた知識を地元の公民館などの講演で皆さんに伝えたり、軽井沢―横川間（国の重要文化財）の観光ガイドも楽しんで行っている。奥様を病で亡くして13年、一人暮らしが長いが、たしかにこれではボケツとしてられないだろうと思う。

□ 地域活動もすごい

もっとすごいのは、原澤さんの地域活動である。

「地域の中で、ちょっとした困りごとのお手伝いをし、喜ばれています。『手伝っていただく

より手伝う喜び』を実感しています」

これは、原澤さんが構成員をしている第2層八幡地区協議体の情報紙「八幡協議体たより」に書かれた文章の一節である。

原澤さんは、協議体が発足した6年前からその構成員をしているが、高崎市の協議体の活動は全国レベルで見てもモデルにしたい活発さである。26ある第2層のそれぞれが地域に合った助け合い活動を展開しているが、八幡地区協議体は、地域支え合いサポーターの仕組みをつくって、登録した人が、声かけや困りごととの相談、ゴミ出しや電球の交換、買い物や畑作業の手伝い、受診の付き添いなど、幅広い「ちょっとしたお手伝い」をしている。

八幡地区のサポーター登録者は155人だが、その地区に住む高齢者は登録がなくても助けてもらえる。地域に困っている人がいれば助けようという地域愛の精神が行き渡っており、しかも「みんな、お金などくれたらやらないよ」と

言っているのだそう。最近では、身体が不自由になった人の買い物や調理、庭の掃除などを継続して手伝う、ちょっと重い助け合いを有償ボランティアでやろうという動きが出てきているという。幅広い無償の助け合いと連動して有償ボランティアの仕組みができれば、これは隙間のない、重層的な助け合いの仕組みになる。

どうしてこんなに良い動きになったのだろうか。

それは、第2層協議体の構成員に地域の各区長（町内会長）と民生委員、公民館長が入り、面としての地域活動に直結していること、そして各区の地域活動がそれぞれの形で根付いてきたことが大きいだろう。

原澤さんの地域活動がそれを物語っている。

□ ついの住み家のある地域

一貫して国鉄マンだった原澤さんは、仕事とゴルフ、夜は飲み会という典型的な仕事人間で、

休日に庭の手入れなどはするものの、地域の活動は奥様任せであった。

原澤さんが八幡地区に居を構えたのは昭和49年、41歳の時である。それまでは高崎駅近くの生家に住んでいたが、ついの住み家とすべく八幡地区に菜園付きの家を購入、母親、会社勤めの妻、息子さん、娘さんで移り住んだ。原澤さんが幼いころ料亭を経営していた父親は、すでに亡くなっていた。

八幡地区は当時は新興住宅地で、ご近所づきあいはいはこれからという地区であったが、それでも他の地区と同様、区長制度はつくられた。

63歳で国鉄の子会社の管理職を退いた原澤さんは、18年わずらって伏せていた母親が、何かと地域のお世話になったことへの恩返しという気持ちもあり、最後まで住む八幡地区が住みやすい町になってほしいという願いもあって、地域活動に入ることにした。

以降、区長の補佐をする嘱託を5年、八幡町

第4地区の区長となって10年、地区住民代表として地域のために汗を流した。住民の困りごと解決のため、1日に2回も市役所に行ったこともある。地域に空き巣が増えたため、苦労して交渉の末、街灯を12本増やし、空き巣がなくなつた。自分たちへの手当を減らし、区長になつてからは懇親会や視察旅行を自費にして、育成会や長寿会への補助を増やし、入学祝い金を新設、敬老祝い金も増やした。この辺りは、国鉄時代、上司の不合理には逆らうが、部下の思いは大切にしたいという原澤さんの氣質が素直に表れている。

□ 人に役立てる特技の一つ、料理

原澤さんの特技の一つ、料理の技と、その前提となる包丁研ぎの技も、原澤さんが地域のために役立ちたいという気持ちの表れとして、発揮されている。

「食べ物作りくらい奥が深くて楽しいものはあ

りませんね」とおっしゃるから、料理は多芸な原澤さんの特技の中でも、特に魅力的なものであるらしい。

「それをまた近所の人が喜んでくれるのが嬉しいのです」

原澤さんは、高級な食材は買わない。安い物で美味しい物を作るという料理哲学の持ち主。マグロの安い切り落としを買ってきてカツを作り、ご近所におすそ分けしたら、「また作つてと言われました」。

玉ねぎ20個、人参7〜8本、肉1・5キロでカレーを2日間かけて作り、ご近所に配ったこともある。また、だるま工房跡を利用し、地域で週1回開催している居場所「八起き」への差し入れも、参加者から待たれている。

□ 男の料理教室

その原澤さんに、公民館長から男の料理教室の依頼が来たのは3年前である。区長を辞めて、



原澤さん（写真中央）が講師を務める男の料理教室

協議体構成員になっていた原澤さんは、これからは男も料理をすることが大事と引き受けた。1回2時間、3回で卒業する。1回に生徒8人、これまでに9回実施しているが、生徒は、

30代から80代まで。若者と高齢者の比率はほぼ半々で、若者は、共稼ぎだから女房の手伝いをしたいという動機、高齢者は、妻が病などでやれなくなったのでという動機が多いそう。

フライパンの使い方から、卵焼き、ぎょうざ等の初心者でもできる調理法を教え、普通に家庭で食べる旬の物、たとえば秋であるとサンマ、キノコの炊き込みご飯を、自分たちで考えさせながら、作らせる。

3回学べば、あとは実践で人のためにも作れるという。

□ 人に役立てる特技の一つ、包丁研ぎ

原澤さんは、高崎市内5か所の公民館で、包丁研ぎ教室を開いて講師をしている。

「和食がユネスコ無形文化遺産に登録されました。和食を支えてきた包丁とその切れ味を支えてきた砥石と研ぎという行為を認識しましょう」と原澤さんは、チラシに書いている。



「すっきりと切れた刺身は、味が違います」と
原澤さんは包丁にこだわる。

原澤さんが包丁研ぎに興味を持ったのは小学
3〜4年生のころ。隣に建具屋さんがあって、
腕のいい職人が丁寧にかんナを研ぐ姿を見て興
味を覚え、高学年になるとかんナ研ぎをやらせ
てもらった。その切れ味に心が躍った。

見よう見まねで覚えたかんナ研ぎが、料理作
りに生きた。

□ 見まねで覚えた料理

料理の腕も、見よう見まねで磨いた。

原澤さんの父親は、子どものころは高崎の繁
華街で料亭を経営していた。何事にも興味を持
つ子だった原澤さんは、料理にも興味を持った
が、母親は、男子厨房に入らずの時代で、原澤
さんが料理をすることを嫌った。

戦後料亭が倒産し、母親がいろいろと働くよ
うになって、中学生になっていた原澤さんも手

伝った。母親の仕事の一つにうどん打ちがあり、
うどんが大好きな原澤さんが手伝ううち、料理
の方もやるようになって、うどんからカレーと、
料理の種類も増えていった。

もともと何にでも興味を持つ性質だから自前
で料理の腕も上がり、国鉄勤務時代は、新湯の
お得意様から直送されてきた鮮魚を自慢の包丁
でさつとさばき、刺身にして上司、同僚に配っ
て驚かせた。

この腕が奥様の介護でも役立っている。奥様
は、最後の3年間、肝硬変を患って自宅で療養
したが、それを原澤さんが支えた。

ご近所の人たちは、「奥さんは働きながら18
年間もお母さんの面倒を見たんだから（原澤さ
んが面倒を見るのは）当然」と言った。原澤さ
んも感謝の思いで料理を作った。

「家内は、ありがとうなんて一言も言わないで、
テレビで料理番組を見ながら、毎日、あれが食
べたい、これが食べたいとリクエストするんで



原澤さんは、健康を考えて朝食は30分から40分かけて6〜7品作り、昼食は麺類、夜は日本酒なら一合、ウイスキーならダブルで2杯。乾

朝食がダイナミ

すよ。私は、塩分や油脂に気を付けながら、リクエストに応えました」。奥様が寄せる全幅の信頼と、それをしっかり受け止める原澤さんの深い愛情が感じられた。

き物と野菜をつまみ、ご飯は食べない。夕方1時間ほど散歩した後の一杯が楽しみ。あとは熟睡。

これでは私
よりぐんと若
々しいのも当
たり前である。

最後に、**厨**

房に入らない

男子へのメツ

セージを尋ね

たら、

「食べず嫌い、

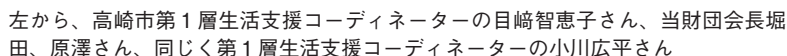
やらず嫌いは

ダメ。自分の

作つた物を食

べるのが健康

と幸せの基で

す
└─

真っ直ぐに、30年

寄稿 4

思いを持った生活者の視点で

住民の心を動かす

熱い志を持ったさわやかインストラクターと
住民主体の地域づくりを共に推進

さわやか福祉財団理事 鶴山 芳子

今秋30周年を迎えるさわやか福祉財団の軌跡を、人を中心にしながらご紹介するシリーズの第4回です。創立以来30年、一貫して「新しいふれあい社会づくり」を共にすすめ、全国にその成果を普及していくことができたのには、心強い協働パートナーであるさわやかインストラクターの皆さんの存在があります。インストラクター制度を立ち上げた状況を振り返りながら、活動の一端をご紹介します。

(編集部)

助け合いの現場と連携した 新しいふれあい社会の推進

〃住民の立場に立ち、住民主体の地域づくりを推進〃。さわやか福祉財団は事務所を東京に構えながら、助け合い活動を中心にした住民主体の地域づくりを全国で推進してきました。その大きな特長が全国のさわやかインストラクターとの協働による取り組みです。

中間支援組織として活動するさわやか福祉財団は、現場の活動を直接行っていない。そこで、当初から現場を持つ実践者と強力に連携することとし、理念の実現を共に目指してきました。この、各地での助け合い活動推進に多大な役割を担ってくれているのがさわやかインストラクターの皆さんです。さわやかインストラクター制度は、当財団の創立当初、1993年から始まりました。推薦で候補者を募り、研修を経て委嘱をします。地域で活躍する皆さんが、ボランティアでそれぞれの担当エリアで働きか

けを行ってくれています。

全国から参集してもらうこともあれば、それぞれのエリアで自主的に集まることも。新しい制度や地域の先事例を学び合い、戦略を立て、モデルをつくり、情報発信をすすめていきます。現在134名。あたたかい地域をつくりたいという心意気が原動力の個性あふれる面々。とはいえ、「地域づくりは住民の皆さんが主役。自分たちは黒衣だから」との思いで活動を行っています。その活躍があつて、当財団はこの30年、草の根の住民・市民の助け合い活動を着実に社会に広げていくことができました。

実践者による講師陣も活躍 有償ボランティアを広げる

まさに多士済々のインストラクターの皆さんですが、全員ご紹介するのは残念ながら難しいため、初期の頃から活動している何人かの方に今回、当時のことも含めてお話を聞きました。

さわやか福祉財団は93年、「リーダー研修会」をスタートさせます。これは、高齢者を支えるボランティア団体を全国に広げることを目標とし、各地で団体のリーダーを養成しようというものです。今後必要となる在宅生活支援の助け合い活動では、特に有償ボランティアの定着が必須との考えで取り組みました。リーダーを養成するには講師役として、すでにボランティア団体を立ち上げているこの道の先輩たちをお願いし、その役割を担う人材づくりを目指して、さわやかインストラクターになっていたいただきました。

リーダー研修会の最初からの講師として、また活動のマニュアルづくりにも関わり、その後、さわやかインストラクターとしても活躍しているお一人が中村順子さん（認定NPO法人コミュニティ・サポートセンター神戸ⅡCS神戸理事長）です。

中村さんが当時理事をされていた神戸ライフ・ケア協会は、有償ボランティアを実践する

全国でも先駆的な団体でした。当時、専業主婦で子育て中だった中村さんは、「有償ボランティアと時間預託という仕組みで助け合いを表現するのは先駆的で自分にもびったりでした」と語り、また、インストラクターとして参加したことも、「今後の社会に必要な取り組みを推進するという前向きな素晴らしい人たちと出会う機会となり、一気に視野が広がりました」と、当手を振り返ってくれました。



中村順子さん（左）。1993年のリーダー研修会開始当初から内容を共に考え、講師としても各地を精力的に回っていた（写真中央演台は堀田力現会長）

95年に阪神・淡路大震災で甚大な被害を受けながらも、先頭を切って地域のコミュニティ再生に尽力し、そして、現在のCS神戸を立ち上げ中間支援として活動を広げている中村さん。さわやかインストラクターとしての活動を牽引してくれている頼もしい存在です。

思いがあるからこそ住民の心が動く

リーダー研修会の参加者は、団体を立ち上げたい人、活動してみたい人、看護師等の専門職、自治体職員、地方議員など幅広く、どの会場もエネルギーがあり熱気にあふれています。時に、参加者の発言はいろいろな方向に割れますが、インストラクターの皆さんは、上手に悩みを引き出し、人、もの、お金、情報等に分けて整理しながら、具体的なノウハウを伝えていきます。研修会終了後は、受講生は、いよいよ地域で勉強会などを開催し仲間づくりに取りかかり、立ち上げに向けて動き出します。その都度、当

財団もバックアップしながら、ふれあいボランティア活動の立ち上げを支援していきます。研修会を始めた当初は、まだインストラクターの制度ありませんから、立ち上げに取り組んでいる途中でもリーダー研修会の講師になつてもらったり、生々しい立ち上げの経過やノウハウ、コツなどを話してもらいました。

「なぜ、立ち上げたのか」「どのように仲間を集めたのか」など、時には失敗談も。それでも必要性を実感し思いを持って立ち上げた話は、人々の心に響きます。生活者の視点を持ち同じ住民の立場であることが、受講生の気持ちも動かし、助け合い活動を広げていきました。

93年の山形でのリーダー研修会に参加した山形県米沢市の柴田信子さん（NPO法人ほえみサービスマイゼン理事長）や加藤由紀子さん（NPO法人ふれあい天童理事長）もその一人です。自身の団体を立ち上げる過程から講師も務めながら、その後、インストラクター1期生に就任してくれました。

加藤さんは、研修に関わった当時について、「無我夢中でした」と振り返ります。介護保険制度が始まるうとする97年の頃、制度に参入するか、助け合い主体で続けるか、現場では選択の悩みがありました。「助け合いの仲間たちの間にも振動が起き、ピリピリとした空気もありましたね。でも、やはり助け合い一筋でいこう」と（加藤さん）。

以来30年、ますます、やりがいを持ち、二

加藤由紀子さん（左）。1992年に助け合い団体を設立し、さわやかインストラクター1期生としてその取り組みも研修会で披露いただいた



ズが増えて忙しい毎日を送る加藤さんですが、行政や地域の男性陣、子どもたち、障がいのある方、認知症の方なども受け入れ、まさに共生の地域づくりを実践中です。ふれあいの居場所や有償ボランティアによる助け合いの実践など、地元天童市の総合事業B型にもそのまま認められ、全国からの視察を受け入れ、インストラクターとしても時間を惜しまず助け合いの推進に尽力してくれています。

研修はじっくりと目標と想いを共有する場

インストラクターが集まって学び合う研修会は、事前に学びたいことを提出してもらい、宿泊型の研修会を重ねるというハードなもの。①リーダー研修会を実習としたインストラクター研修会を受講し（3泊4日）、②インストラクター実地研修会を受講（4泊5日程度）、さらに③東京での合同研修会（2泊3日）を受講。グループワークやロールプレイングなども含め

た研修で、最後にレポートの提出があり、委嘱状の交付という流れでした。

時期によって細かいプログラムは異なりますが、まさに思いがあつてこそ続く中身の濃い研修です。泊まり込んでじっくりと話し合うことで同志となり、その関係は助け合い活動実践における様々な壁を乗り越える原動力にもなっていると思います。

当初の資格要件では、主に高齢者の助け合い団体新設・運営経験者で、地域性やグループ独自性を尊重しつつ、新しいコミュニティづくりを考えられる方、相手の意見や考えを十分に尊重して聞ける方、自分の利益だけを追求せず、学習意欲のある方であり共に理念の実現を目指す方としました。

その後、地域の状況を踏まえ、中間支援組織での活動者、子どもや障がい者、現役世代を対象に活動をしている人も対象に広げていきますが、お互いさまの助け合いを広げるという基本は不変です。

インストラクター倍增戦略とブロック化「ふれあい組織づくり推進大綱」

介護保険制度は2000年に発足しました。ボランティア活動の前提として、ケアの制度が必要になると財団は主張し、運動もして、私たちはふれあいボランティア活動に専念できる社会的環境ができたのです。

「介護保険とふれあいボランティア活動は車の両輪」とインストラクターとも共有しながら、活動の軸をそれまでの在宅での有償ボランティアと併せて、心の交流を中核とする居場所などもっとソフトなふれあい活動とに純化していきます。

98年にインストラクターの皆さんと、「ふれあい組織づくり推進大綱」を取りまとめました。介護保険制度発足5年後の2005年を目標に、全国市区町村にふれあいボランティア団体をしっかり広げていこうというものです。そのため、推進役としてのインストラクター養成強化

もすすめました。その働きかけを先頭に立つて
すすめてくれたのが、故米山孝平さん（NPO
法人流山ユー・アイ ネット理事長・当時）で
した。

米山さんは企業を退職後、地元自治会活動で
仲間と地域運動を起こすなどリーダーシップを
発揮。その時に助け合いの必要性を感じ、リー
ダー研修会に参加し、当財団作成の活動マニ
ュアルを参考にユー・アイ ネットを立ち上げ、
その後も講師としても活躍してくれました。男
性も有償ボランティアで生活支援に積極的に参



故米山孝平さん。
インストラクターとして多世代の自然なふれ
あい・助け合いを広げていただいた。写真は
地域で小学生などと交流する様子

加する助け合いの活動は先駆的なものとして全
国でも注目を集めました。

この同時に、インストラクターの活動を全
国一律から地域ブロック単位にして、ネットワ
ークを形成して実践していこうという考えもす
すめていきます。米山さんはこの土台づくりの
意味を深く理解し、インストラクターの立場か
ら強力に呼びかけ、多大な貢献をしてしてくれま
した。現在、全国13の地域ブロックに分かれて、
ブロック内での連携をしながら活動を展開して
います。

近隣助け合いの推進 ふれあいの居場所や時間通貨

ふれあいボランティア活動を広めるため、ま
ず、近隣活動推進の第一人者である木原孝久さ
ん（住民流福祉総合研究所所長）の協力を得て、
「近隣型助け合い研究会」を主宰し、それまで
の高齢者中心から、子どもと高齢者がふれあう

関係や、「誰もが役に立つうれしさ」を実感しながら助け合う関係づくりを推進する事業に取り組みました。「助け合い体験ゲーム」をツールに、相互扶助型地域通貨である「時間通貨」を推進していきます。そして、07年には、「ふれあいの居場所づくり」に本格的に取り組み始めます。

「時間通貨」とは、誰にとっても同じ価値である時間を基準に、誰もが対等に助け合える仕組みです。

「うれしい気持ちを形に」。助けたり助けられたいのうれしさやありがたうの気持ちを時間通貨というツールで強調し、つながる関係を強くしていこうというものです。この取り組みを強力に推進したのは、インストラクターとして長く活躍してくれた、静岡県袋井市の稲葉ゆり子さん（たすけあい遠州代表）、徳島県藍住町の麻野信子さん（NPO法人さわやか徳島会長）をはじめとする人たちです。小さな子どもたちと高齢者等のやさしいつながりを広げ、全国モ

デルとして実践されました。

「助けるほうも助けられるほうもない横一線の活動。

子どもも高齢者も理解できる。目が開かれた思いがしました」と、

麻野さんは当時を振り返ります。

稲葉さんは、当財団が居場所のプロジェクトを始める前から居場所を実践しています。さわやかインストラクター養成のための実地研修会では多くのインストラクター候補を受け入れ、助け合いに必要な共感や考え方への理解を広げてくれました。

インストラクターとして、また、地域で実践しながら助け合いを広げてきた過程について稲



現在もインストラクターとして活躍中の中田壽子さん（中央）たちと、稲葉ゆり子さん（左）。研修会後の交流会にて

葉さんは、「先を見据えて目的を明確に持ち、自信を持って取り組むことができたと思います」と話してくれました。稲葉さんのモットーは、「変わることを楽しむ」。コロナ禍を受けて、自分たちができる地域に必要な活動は何かと皆で考え、それまでの居場所をたため、新しい居場所や生活支援の活動を始めています。「楽しいからやる」という仲間の皆さんとの活動は25年以上続いています。お金では買えない助け合い活動の大切さを仲間たちとの実践で伝えています。

生活支援コーディネーターと連携 住民主体の地域づくりをさらに推進

2015年に国が始めた生活支援コーディネーターの取り組みは、元々、地域の助け合い推進には、さわやかインストラクターのようなまさに住民の立場で核となる推進者が必要という考えから制度化されたものです。当財団では、

この制度の始まりとともに、助け合いを全国に効果的に広めるため、さわやかインストラクターの位置付けも発展的に見直し、生活支援コーディネーターの助け合いづくりを応援する役割としました。

今年3月のブロック全国協働戦略会議で、「今後3年をかけて13ブロックを県単位に細分化しながら、よりきめ細かく住民のニーズに定める助け合いをすすめ、共生の地域づくりを住民主体ですすめよう」と財団から提案しました。現在、各地域の実情を踏まえてすすめる検討をしております。

「志を持ち実践してきたその思いが、人々の心を動かす」。これはさわやかインストラクターの特長であり武器でもあります。これからは各県ごとに同じ志を持ち、地域に活動を広げたいという仲間も広げながら、生活支援コーディネーターや関係者と連携した体制づくりを共にすすめ、住民主体の地域づくりをさらに推進していきます。



共に支え合って20数年。 その人らしく暮らせる地域づくりを

NPO法人ほっとあい（宮城県大河原町）

20年以上も前に、やがて訪れる超高齢社会を見据えて、共に支え合って生きることができると地域づくりを目指して活動を始めた「ほっとあい」。公的サービスだけでは不足する、「その人が望むその人らしい生活の実現」を支援するという活動目的と理念は、実際に目の前に出現した今日の社会状況において、ますます重要度が増しています。そこで、これまでの歩みを振り返り、助け合い活動に対する思いを聞きました。（取材：文／城石 眞紀子）

始まりは 「在宅福祉を考える研修会」から

宮城県南部の柴田郡に属する大河原

町。人口約2万3000人のコンパク

トな町ながら、行政機関や商業・工業
が集約された県南の中心都市である。

この地で助け合い活動を展開する

「ほっとあい」の出発は、1997年

にさかのぼる。当時は少子高齢化の間

題が大きく取り上げられるようになった頃。これからは、介護や子育てを地

域で一緒に考えていく必要があると、

同年9月、大河原町の社会福祉協議会

では「在宅福祉を考える研修会」を開



活動の拠点「ほっとあいの家」

催。この研修会に参加した有志が中心となって、翌98年10月に発足したのが「住民参加型在宅福祉サービスほっとあい」だ。

立ち上げメンバーの一人で、さわやかインストラクターでもある副理事長の渡邊典子さん（70歳）は、次のように振り返る。

「研修会の後、『どのような状態になっても、地域で暮らしていくというの

は必要だよね。私たちにできることがあったらやってみよう。みんなであちよと話し合ってみない？』とい

う軽い気持ちから、当初は始まりました。その話し合いを通して、お互いを理解し合って気持ちを共有。自主的な研修を行う中で、地域で助けを必要としている人とのつながりも生まれ、支援させていただく機会も得ました。発足までの1年間の準備期間には100回ほどの集まりを持ちましたが、おかげで自分たちのやりたいことの方針や目的も明確になったように思います」

渡邊さんは、仙台の実家で祖父の介護を担う母親の苦勞を見て育った。また結婚後、3人の子育てが一段落してからは、特別養護老人ホームで介護のパート職に就き、その後は大河原町社会福祉協議会の訪問介護員となった。施設も在宅も見た経験から、「施設は施設が必要。公的サービスも必要。でもそれだけでは、その人らしく生活していくには足りないものがたくさんある」と痛感。その思いが、助け合いに軸足を置いて活動するきっかけになっ

たという。

「ほっとあい」という団体名には、「住民が参加する。住み慣れた地域で。そして、ほっとする、あったかい、助け合い、愛ある活動や支援をしていこう」という思いが込められている。

利用者の個別の状況に寄り添った柔軟な生活支援サービス提供

2000年1月にはNPO法人を取得。現在のほっとあいは、自主事業だけでなく、介護保険サービス事業、行政委託サービス事業など12の事業を運営している。これは意図的に事業を拡大してきたわけではなく、出会った人たちのニーズに応じていく中で自然と増えてきたものだという。

核となる自主事業の住民参加型の助け合い活動には、大きく分けて2つの柱がある。

1つ目は、発足時から行ってきた「ファミリーサポートホームヘルプサ

ービス」だ。これは、「困ったときはお互いさま」の有償による生活支援の助け合い活動であり、公的なサービスでは対象にならない、あるいは不足するニーズに柔軟に対応。外出支援も行っている。

「今日も、人工透析を受けている方の病院への付き添いをしてきたところです。年齢や障がいの有無に関わらず、支援が必要な方ならどなたにも利用していただいています」と話すのは、ホームヘルプサービス担当理事の佐藤まゆ美さん（66歳）。活動する上で大切にしているのは、設立当初に掲げた理念でもある「誰もが安心し、人間としての尊厳と生きる意欲を持ち続け、自立して自分らしく暮らしていけるように支援していく」こと。

住み慣れた自分の家で暮らしたいという強い信念を持っていた、ある一人暮らしの90代女性（故人）への支援は多岐に渡った。一緒にお墓参りをした

り、お歳暮やお中元の買い物とお届けの同行、家屋の細かな修理、「ひな祭り会」開催のお手伝い、料理を教えてもらうという名目で一緒に行う調理等々。いずれも彼女がこれまで大切にしてきた、こだわりのある生活を継続するための支援であった。

視覚障がいのある40代の男性には、コンサート、町内外で行われる催し物、居酒屋、散歩、映画観賞など、見ることが不自由でなければ当たり前にできる生活の実現を支援した。

「ほかに、母親がいないお子さんの入学式の付き添い、酸素吸入をしないと生活できない方の支援等々。在宅のときから利用している方が施設に入った後も、散歩などに連れ出してほしいとの要望があり、引き続きサポートしているケースもあります」

ホームヘルプサービスの利用者数は、20年度の実績で25人、延べ1271・5時間。「利用者の個別の状況に寄り



柔軟な思考と行動力を持つ
ボランティアの皆さん

添う中では心のケアも大切にし、共に笑い、喜び合い、ときには涙することもあります。『ありがとう』とか『来てもらうのが楽しみ』といった言葉が活動のエネルギーになります」と佐藤さん。相手の立場になって考え、共感し、行動することで生まれる信頼関係が、より良い支援につながっている。

多様な集いの場を設けて
つながる機会を提供

もう1つの活動の柱は、集いの場づ

くりだ。



活動はみんなで楽しく支え合って

「1シヨン」と名付けた地域の居場所を週1回開催（コロナ収束まで休止）。

さらに、今年4月

利用するほどではないけれど、おしゃべりサロンだったら好きなきに行つて、好きなきに帰れるから参加したいという方もいるし、認知症の相談をしたいという方は、今後はほっとカフェに足を運んでもらえるかもしれまんからね」とは渡邊さん。

集いの場では、ものづくりやゲーム、調理、運動などその日の参加メンバーによつてさまざまな活動を展開。「見てあげる人」「見てもらう人」という

関係ではなく、「幸せは人と人とのつながりにある」をモットーに、交流による相乗効果を大切にしている。「会う人がいる」「話す人がいる」「やる

ことがある」といった人と人との関わり合いから生まれる相互作用、信頼関係、役に立つ喜びは、心と体を元気にし、生きがいと尊厳のある生活になくしてはならない要素だと考えているからだ。

拠点となるほっとあいの家で実施されている会員制の宅老サービス事業「ほっとあいの家」は、1時間200円で利用でき、日曜日を除く毎日実施。必要に応じて泊まりにも対応している。これと同時に開催している「おしゃべりサロン ほっとあい」は、誰でも参加できて、地域の人たちが楽しく交流できるふれあい事業だ。参加料金は200円で、月・水・土曜日に実施。また、大河原駅前でも「ほっとあい 夢ステ

からは大河原町委託事業として、認知不安のある人とその家族に限らず、地域の誰でもが参加できる「ほっとカフェ」も開設した。こちらはコロナ禍で活動開始の延期を余儀なくされていたが、6月から始められるようになった。専門職として、ケアマネジャーがいつでも相談にあたる体制を取っているという。

「いろいろな集いの場を設けているのは、気軽につながつてほしいとの思いからです。例えば、ほっとあいの家を

渡邊さんは甚大な津波被害を受けた同じ宮城県山の元町に、財団の鶴山芳子理事と一緒に応援に入った経験を持つ。その際、避難所や仮設住宅をまわる中であらためて痛感したのは、つながる場所があることの大切さだったという。

「みんなでおしゃべりをしたり、おいしいものを一緒に食べたり。悩みごとの解決まではできなくても、吐露できる場があることで皆さんがもう一度笑えるようになっていった姿を見て、私も活動を始めたときの「純粋に助け合いを広げたい」という原点をもう一度思い起こさせてもらいました。だからこそ、自分に合った関わりができ、生きがいを持ち、心と体の健康が図れるような場づくりと受け入れ体制の構築を目指しているのです」

感謝の気持ちを循環させて 支え合いを広げていきたい

こうした集いの場には、有償・無償

のたくさんの方のボランティアが参加している。

おしゃべり
サロンを手伝
う80歳の女性
もその一人。

シルバー人材
センターに登
録を断られ、

「何か手伝え
ることはある
かしら？」と
ほっとあいに
やってきたの
が75歳のとき。

「自分ができることを見つけていろんなことをやってくださっています。特に、寄り添う必要性のある方を敏感にキャッチして自然に寄り添うのがお得意なので、利用者さんとはとても安心



感謝の気持ちを循環させる「ありがとうカード」

できるんです。彼女自身も自分が頼りにされていることが生きがいになって、雨の日も雪の日も元気に歩いて通ってきて、活動を手助けしてくれています」

渡邊さんは「私たち運営スタッフの仕事の多くは役割探し」だと言い、利用者も含めて、ここではみんなが何らかの役割を持つ。配膳の手伝い、献立書き、朝の会の司会など、たとえ認知症があっても、見守ればできることはたくさんある。そして、お互いが認め合うことで自信が付き、元気になる。ほっとあいでは嬉しい気持ちを形にした「ありがとうカード」も発行。各種手伝いに対する感謝の気持ちを伝えたいときなどに「ありがとう」の言葉と一緒に手渡ししているそう。

「このカードは、おしゃべりサロンや夢ステーション、ほっとあいの家の参加券としても使えるものですが、金券とすることが趣旨ではありません。お友だちに差し上げて利用してもらって

もいいし、どう使うかはもらった人の自由。渡すときにはいつ、何をしてもらったのか、日付と誰から誰へと名前を書いて、感謝の気持ちをぐるぐると循環させようという取り組みです」

ありがとうカードを循環させる費用は自ら生み出す。利用者やボランティアと協力して手作り品を作成・販売したり、家庭菜園でできた野菜などを寄付してもらい、それを販売することで原資に充てている。

「私たちの活動は、支え合い、つながり合い、活かし合い、育ち合う関係づくりです。そういう考え方の醸成を、活動を通して少しでも地域に広めていければと思っています」と渡邊さんは言う。佐藤さんは「私たちもだいたい年を取ってきました。でも、人生の先輩である皆さんの姿を見せてもらって、まだまだ頑張れるよねとか、いずれは運営側からボランティアとして関わればよいねなどと話しています。

これまで皆さんに支えられて努力してきましたが、さらに知恵と力をお借りして、ほっとあいの営みを次世代につなげる課題に取り組んでいきたい」と抱負を語る。

その活動は、公的サービスも含めた地域のさまざまな支援ともつながり合う。知恵や経験を寄せ合い協働すれば、この先の難局も乗り越えていけるはずだ。地域で果たすほっとあいの役割の大切さと大きさが、ますます期待されている。



設立時から共に歩んできた佐藤さん（左）と渡邊さん

高齢の方も、障がいのある方も、子どもたちも、誰もが人間としての尊厳と生きる意欲を持ち続け、自立して、自分らしく安心して暮らしていくことのできる、地域づくりと生きがいのある長寿社会の建設に協力することを目的に活動するNPO法人。主な事業内容は、①住民参加型在宅福祉サービス事業、②行政委託サービス、③障害者総合支援法に基づく事業、④介護保険に関する事業など。①は有償ボランティアによる自主事業で、ファミリーサポートホームヘルプサービス事業（外出支援移動サービスを含む）、宅老サービス事業（ほっとあいの家）、地域交流ふれあい事業（おしゃべりサロンほっとあい・ほっとあい夢ステーション）を実施している。

●連絡先／〒989-1241 宮城県柴田郡大河原町字町279番地1

電話 0224-52-8555 ホームページ <http://www.hoteye.net>

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、コロナ禍での困りごと解決のための活動や、さまざまな世代や人々が参加する地域共生社会への取り組みを支援している「地域助け合い基金」。今月号も、基金によって活動を広げたり、新たに活動をスタートした団体をご紹介します。

なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに順次アップしていきますので、ぜひご覧ください。

埼玉県飯能市

**基金を通じて、太く強い活動の基礎、
未来へのつながりができた**

ねりんワークス（まちなか木育、ピサロンはのつきときとひろば）

助成金額 15万円

ねりんワークスでは、「木のもつチカラ、子育てに」をテーマとして、^{もくい}木育を体感できる子育て応援施設を2015年に設立。国産木材の優良玩具での自由遊びや簡

単木材体験ができる乳幼児向け親子サロンを運営しています。木製の玩具は、地元特産の木材を使用して地元の木工加工所に加工を依頼、拠点も材木屋さんの2階を提供してもらうなど、地域と子育てがつながるように、また参加する人の郷土愛



が高まるように活動しています。

本基金の助成金で、以前より木のおもちゃでの自由遊びに追加したいと考えていたスプーン、カスターネット、おままごと用器を購入しました。また、現在の社会状況下で、サロンを利用するお母さんの中には精神的な不安を感じていたり、妊娠期や産後の健康について問題を抱えている方も多くいます。そのような方々のために、ヨガ講師の資格を持つスタッフによるワークショップを行う体制を整えようと、助成金でワークショップのためのヨガブロックを開発できることになったということです。



さらに、コロナ禍でスタッフの家族のテレワークが増えたことから、今まで使用していた個人のパソコンが活動に自由に使えなくなり、助成金で団体用パソコンを購入。SNSでの情報発信、日誌作成、各種集計、チラシ作成が滞りなく継続できる環境が整ったとのことでした。

「こういった状況の中で、積極的にイベントを開催し、新たなつながりをつくることは難しかったのですが、運営を継続できたことで確実に強くなった活動の基礎、未来へのつながりをつくることができたのではないかと思います。このたびはご支援いただきまして本当にありがとうございました。」との報告を下さいました。

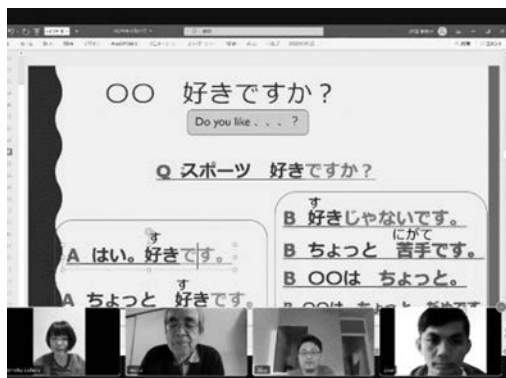
大阪府大阪市

コロナ禍を機に、語学教室のリモート活動を本格化

森之宮コミュニティ国際交流サロン（もりこくサロン）

助成金額 15万円

森之宮コミュニティ国際交流サロンは、地域の教育力向上を目指した日本人小学生の英語教室、外国にルーツを持



動画を活用したレッスンの様子

つ人の居場所としての日本語教室を実施している団体です。

コロナ禍で1か所に集まることが困難な状況となり、

オンラインによる語学教室やメールマガジン等リモートの活動を取り入れましたが、一部の参加者にとどま

っていました。そこで本基金の助成金を活用し、リモート活動を本格化

すべくeラーニング用の教材動画を制作しました。動画は15本、一部は

YouTube等で一般にも公開し、誰でも見られるようにしました。動画には日本語学習者の母国語を織り交ぜ、より理解・利用しやすいものを目指した、ということです。もりこくサロンには、母国に配偶者を置いて日本で働いている在留外国人もいるため、その配偶者にもオンラインでレッスンに参加してもらうことで、交流を広げているとのこと。

「森之宮には在留外国人が多くいます。こうした文化や生まれ育った環境が異なる人々がいきいきと地域で生活し、その多様性が地域活性化に結び付けばと思います、活動します。お互いの習慣や考え方の違いを乗り越え、誰もが住みやすい地域になれば」と報告を寄せてくださいました。

鳥取県米子市

新たに集いの場運営団体を結成
交流や助け合いの基礎に

富士見いこいの会

助成金額 15万円

富士見いこいの会が結成される前、この地区では在宅福

社員を中心に一人暮らし・高齢者主体への見守り活動が月1回行われてきました。昨年度までは老人会によるサロン活動もあり、集いの場になっていましたが、会員の高齢化から運営が困難となり解散。しかし、コロナ禍での閉じこもりや体力・気力の低下もあり、地域には高齢者も含む住民が気軽に集まり、交流や助け合いの基礎となる場が必要だとあらためて感じた住民が中心となって、集いの場を運営する団体を結成しました。

同じ頃、地域包括支援センターから老人クラブ解散により使用されなくなった「富士見町老人憩いの家」の活用について相談があったことから、そこで月2回集う場を立ち上げることができました。活動には、自治会長や民生児童委員のほか地域ボランティアも参加し、検討・準備を進めたということです。

本基金の助成金は、机やイス、保険料、非接触型体温計、コーヒーマーカー、事務用品等に充てられました。

「（集いの場は）参加すれば元気をもらえる場で

す。コロナ禍での外出自粛により、地域の中で孤立したり体力が低下したりする方が出ないよう、活動を続けていきたいと思っています」と今後の抱負を寄せてくださいました。



活動開始のための協議の様子



憩いの家で行われた茶話会の様子

「地域助け合い基金」状況のご報告

皆様のご支援により全国各地の助け合いを助成している「地域助け合い基金」。

6月15日までの状況をご報告いたします。

◎寄付受付額

197件 1044万700円

このほかに当財団より6千万円を供出

◎助成実行額

513件 684万73350円

(6月15日 当財団ホームページ開示時点)

本基金には、これまでに約200件のご寄付を頂戴しております。ご支援くださいました皆様に、心より御礼申し上げます。助成実行件数は500件以上、約700万円が地域の助け合いを広げるために役立っています。今月号でも助成先についてご紹介しておりますので、本文26～29ページ

ジおよび裏表紙をどうぞご覧ください。

今年3月までの集計の結果、助成先の団体・個人が支援している対象は、高齢者と子どもがそれぞれ約2割、続いて障がい者が多く、生活困窮、認知症、外国人、その他と続きます。1団体で複数対象を支援していることも多く、地域の助け合いは、属性にかかわらずさまざまな人が参加して広く行われていることが見て取れました。

今後も当財団は、本基金を通して全国に住民主体の助け合い活動が広がるよう支援させていただきまします。皆様の引き続きのご支援を何卒よろしくお願い申し上げます。

(事務局長・内田)



クレジットカード
決済ページ



財団ホームページ内
基金関連ページ

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。

●基金に関する情報、およびクレジットカード決済は、QRコードもご利用ください！

基金に関する
ご意見・お問合せ

<地域助け合い基金担当>

電話：(03) 5470-7751 FAX：(03) 5470-7755

メール：mail@sawayakazaidan.or.jp

移住

悪くないですよ

第8回

移住とは、自由。

寺田 幸代さん（岐阜県美濃市）

一生の仕事を伝統文化の継承と決め、自らの感覚を信じて岐阜県美濃市に移住した寺田幸代さん（40歳）。1300年以上の歴史を誇る美濃和紙の職人として、長良川の支流近くに暮らし、「毎日こんなに楽しくていいのかな」と大らかに笑う寺田さんに、和紙作りの仕事と田舎での自由な生き方について聞きました。

（取材・文／塩瀬 潔泉）

自分の感覚を信じる

子どもの頃から活発で、得意科目は体育だったという寺田幸代さん。その一方で、さまざまな紙や便箋を買い求めている、絵を描いたり作品を作っ

たりして楽しんでいた。高校は生まれ育った神奈川県横浜にある私立の女子校で、周りの友人たちと同様、大学に進学する予定だったが、家庭の事情で急ぎよ職業訓練校に進む。そこで興味のあ



自身の工房で紙を漉く寺田さん

● 美濃市



った建築を専攻し、設計などの仕事をしたが、自分が造りたい家を自由に造れるわけではなく、数年で退職。働くこと自体は好きで、いくつかの転職先でも仕事にはすぐ慣れたが、「私が本当にやりたいことは何なのか」というモヤモヤした状態が続いた。そして30歳を過ぎた頃。

「一生の仕事を決めなければ、これからは体力的に難しくなるし、選択肢も減ってしまう。やるなら絶対にもものづくりで、日本の伝統文化を継承しよう、と。子どもの頃に紙が好きだったことも思い出しました」

いろいろ調べて、和紙が三重の伊勢形紙いせかたがみの世界に入ろうと、訪ねてみたのが伊勢、徳島、鳥取、そして美濃だ。和紙で知られる土地はほかにもあるが、大事なのは有名かどうかではなく、自分のやりたいことがそこにあるかどうか。そして、「行ってみよう」と思える場所だった。

「美濃の町を少し歩いてすぐ、『自分が住むのはここだな』と感じました。これはもう感覚でしかないのですが」

国の伝統的建造物群保存地区「うだつの上がる町並み」にあるお店で教えてもらった「美濃和紙の里会館」に行き、締め切りを過ぎた和紙作りのスクール参加を受け付けてもらい、後日再び美濃を訪ねて実際に紙漉かみすきを教わった。

「すごく楽しかったし、講師や受講生もとてもいい方々だったんです。これはやるしかない！と思いました」

現在、工房兼自宅としている物件も、庭を見てすぐ直感的に「ここだ」と思い、1年間借家として住んだ後に購入した。これまでも、自分の感覚を信じて物事を決めてきたという寺田さん。美濃に移住してさらに感覚が冴えてきたそうだ。

「誰でも本来、そういう感覚って持っていると思います。ただ、都会にいますとすごい量の情報が入ってくるために、鈍ってしまうのかもしれないよね」

○ 師匠・澤村正さんとの出会い

美濃和紙の里といえども、今はどの工房もあま



2018年、美濃市で開催された和紙サミットでの寺田さんと師匠の澤村さん

(笑)。なぜ弟子入らせてくれたか、実はいまだに謎なんです、握手したのは紙漉きに

り弟子を取っていない。そんな中、寺田さんを受け入れ、職人として育ててくれたのが澤村正さんだ。澤村さんは、*ほんみのし本美濃紙の漉き手であり、京都迎賓館の障子や照明器具を担当したことも知られる。現在は本美濃紙保存会の名誉会長だが、90歳を過ぎてなお、50歳下の寺田さんより紙を漉いているという。

2013年、紹介してくれた職人団体の会長を介して初めて会ったとき、澤村さんは少し話をすると寺田さんと握手をし、「すぐ来ていいよ」と言ってくれたそうだ。

必要な握力を見たのかな。それから、私は身長が167センチあるので、紙を漉くのにリーチが長くて良かったのかも」

その年の3月、寺田さんは美濃に移住し、和紙職人としての人生を歩み始めた。

***本美濃紙**……美濃和紙の中でも、材料や製法、漉き手などが厳格に定められている国指定の重要無形文化財。ユネスコ無形文化遺産にも登録されている。

○ 昔の風習が残っているから、伝統も残る

17年に自分の工房を持つてからも、昨年3月まで寺田さんは澤村さんの元へ修業に通った。これまで叱られることはあまりなかったが、最初の頃、けしきみず化粧水という作業をしていたところ、横で澤村さんに「違う」「違う」と言われ続けた。紙漉きの技術は感覚で身に付けるしかなく、一体何が違うのかわからず泣きかくなった、と話してくれた。寺田さんが「仙人かと思うほどの集中力」と表現する澤村さんは、寺田さんが仕事をする後ろ姿を見るだけで「今日は気持ちが悪くないな」

と言いつける。これまで、仕事に対する考え方や人生観でぶつかったこともあるが、何年も和紙作りを通して共に過ごし、最近はお互いを理解できるようになってきた、と寺田さん。

「話しているだけですごく勉強になります。そういえば、師匠にも地元の人にも『いつ結婚するのか』みたいなことを結構言われましたけど、今どきの都会では考えられないような、そういった価値観や風習が残っているからこそ、伝統も残っていると思います」

移住してから数年前まで、寺田さんは地元で仲良くなった友人と着物イベントをしたり、移住仲間と一緒に「美濃和紙よいマルシェ」という



美濃和紙よいマルシェの様子

お祭りを年1回開催していた。地元の人も移住者も、みんな仲良くなろうとする企画である。「美濃の人たちは、保守的かと思う反面、慣れなくてすごくフレンドリーです。マルシェも3年目くらいから、『私たちも何かやろうか』と声をかけてくれるようになりました」と、寺田さんは嬉しそうに振り返った。

● これからの10年は、仕事で遊び倒す！

美濃に移住して8年余り、真摯に和紙と向き合ってきた寺田さんには今、SNSや口コミで建築家やクリエイター、一般の人からも、障子や壁紙として使いたいと注文が来るようになった。これからについては、「何でも地道にやること、大事」と前置きした上で、

「私にしか作れない紙を追求し続けます。次世代に美濃和紙を継承することが役目だと思っているので、いざれ弟子は取りますが、それは50歳からこれからの10年は自由にやると決めているので、すごく楽しみ。仕事で遊び倒します！」



寺田さんが住む蕨生（わらび）地区を流れる
長良川の支流、板取川

〇 ムダこそが最大のぜいたく

寺田さんは、仕事の合間に近所を流れる板取川の川原に行ってお茶を飲んで過ごしたり、「面倒くさいけど、いいな」と思いながら庭の草引きをしたりする。

「そういう時間がいかに豊かで大切か、田舎に来て実感しました。和紙の仕事もどれだけ手間暇かけたかが出来に大きく影響しますが、和紙に限らず、今は『手間暇かける』ということがあまりにも置き去りにされている気がします」

現代社会では、何にでも効率を求めるような風潮もある。

「誰でも、せっかくの休みには時間やお金をかけて出

かけたりしますが、考えようによってはそれって“ムダ”ですよ。でも、すごく楽しくて、みんな大事にしているはず。ということは、そのムダこそが実は最大のぜいたくだと思いませんか？」
確かに、その通りだ。

〇 一人ひとりに合う土地があり、土地に選ばれて暮らしている

そこに移住して、どう暮らすのか。それが明確だったから、寺田さんの美濃での暮らしは充実しているように見える。しかし、寺田さんの考え方を聞いて、目から鱗が落ちる思いがした。

「私は、住もうとする人が土地を選ぶのではなく、土地が人を選ぶと思っています。私も、美濃という土地に選んでもらえて、師匠や地元の方々と出会うことができたから今があります。誰にでも合った土地がきつとあるので、もし住みたいと思った場所でうまくいなくても、焦らずに別のタイミング、別の場所を探してみてもいいです」

確かに、確かに。移住はもっと、自由でいいのだ。

老いの暮らしを創る

早めの引っ越し ③

福祉ジャーナリスト 村田 幸子

兵庫県尼崎市にある49戸のマンション。そこが、私たちが選んだ住まいです。7人それぞれ、自分の懐具合と相談し、気に入った部屋を選びました。

関西に住むということは、この試みの発端となった遠野旅行の時から決めていたのです。

というのは、NHKで仕事をしていた現役時代、私は2度、大阪放送局に転勤しています。東京生まれの東京育ち。にもかかわらず私は、関西の環境に違和感なく溶け込め、すっかり馴染んでしまいました。従って遠野でも、何の迷いも疑問もなく「いいわよ、関西で」と、その場で決断することが出来たのです。

当時、私は東京で、まだ元氣だった母と一緒に暮らししていましたので、行ったり来たり

の中で引っ越し開始です。エアコンやカーテンを新しくする場合、何人が集まれば値段の交渉もしやすいと、交渉上手な人が請け負ってくれるなど、7人いれば7人の知恵と人脈。これからの暮らしには7倍の拡がりが出るのだと、わくわく感一入でした。

部屋の中に山積みになったダンボール箱が少なくなり、やれやれと一息ついた頃。まだ夏の名残の強烈な日差しが差し込む日でした。一休みしていた時、胸の奥底から込み上げてくる何とも言えない感覚に、突如襲われました。「うーっ」と思わず声を出したくなるような名状し難い胸苦しさ、切なさ。わけのわからない恐れのような感覚。私はひどくうろたえ、呆然としてしまいました。





どうということだろうか。

寂寥感、孤独感、侘しい、悲しい、虚しいなどなど、思いつく限りの言葉を当てはめてみましたが、どれもこれもしっくりしません。私は間違った選択をしてしまったのだろうか。ここで皆と暮らしていく自信が持てないのだろうか。

この気持ちをすぐ仲間たちに話しました。

「だから、私たちがいるんじゃない」と、異口同音に。しかし、それとこれとはまったく違うのです。助け合える仲間がいるという心強さや楽しさで解決できる問題ではない。そのことに私自身が気づき、驚き、慌てふためいていたのです。私は、自らの胸の内を探り、あらゆることを考え、言いようなない感覚に当てはまる言葉を、さまざま探しました。

「寄る辺のなさ」。

ストンと胸に落ちたのは、この言葉でした。この「寄る辺のなさ」は、一体どうしたら解

決出来るのだろうか。解決出来なければ、私はここでは暮らしていけない。それほど追い詰められたものでした。

東京生まれの東京育ち。

いくら関西に馴染めたといっても「根っこ」は東京だ。だったら東京との関わりを断つてはいけない。出来得る限り東京の家を残しておこう、生まれ育った地に、いつでも戻れるという状況を残しておこう。こう考えたら、スッと気分はラクになりました。

「寄る辺のなさ」は「根っこ」をもぎ取られる切なさからきていたのです。若い時と違って、これから関西に根を下ろし暮らしを育んでいくという年代ではありません。残された時間の方が短いのです。私はすでにしっかりと、東京に根を張っていました。この根っこを大事にしたなら、ここ関西でやっていける。私は一皮、剥けました。



(むらた さちこ) 立教大学英米文学科卒業後、NHKにアナウンサーとして入局。報道番組のリポーターや社会性のある硬派の番組を中心に担当。1990年、解説委員に就任。NHKスペシャル「あなたが寝たきりになった時」、NHKモーニングワイド「高齢化社会」のキャスター他、多くの番組を担当。2004年、解説委員を退職後も高齢者問題の第一人者として活躍中。現在、江戸川総合人生大学「介護・健康学科」学科長。

「地域助け合い基金」で コロナ禍を乗り越えて共生社会へ

皆様からのご寄付をお待ちしています！

1. 寄付金の使途

共生社会を推進するため、助け合い活動の支援に活用させていただきます。

助成の対象は、地域で暮らす人同士の助け合い活動であり、新たに団体を設立する場合のほか、新たに活動を広げる場合やコロナ禍に対応して特別な助け合い活動を行う場合も含みます。

高齢者、子ども、認知症、障がい、生活困窮の方々、刑余者、外国人、ケアラの支援ほか、分野は問いません。ただし、日本国内の活動に限ります。

本基金は、支援したい市区町村（区は東京都の特別区）をご指定いただけます。

2. 税制上の優遇措置

当財団にいただいたご寄付は、税制上の優遇措置の対象となります（当財団発行の領収証が必要となります）。

3. ご寄付の方法

（1）銀行振込によるご寄付

三井住友銀行 浜松町支店（普通）口座番号 7859452

三菱UFJ銀行 浜松町支店（普通）口座番号 0095446

（口座名義 ※いずれも同様）

公益財団法人さわか福祉財団 地域助け合い基金

※銀行お振り込みの場合は、送金者の情報がカタカナ表記のお名前のみとなるため、当財団発行の領収書が必要な場合や地域の指定をご希望の場合は、お手数ですが「寄付申込書」を当財団宛お送りください。当財団へのお電話でも承ります。

（2）郵便振替によるご寄付

（口座記号番号） 00110-7-709627

（加入者名） 公益財団法人さわか福祉財団

※通信欄に、ご指定がある場合の市区町村名（区は東京都の特別区）と、ひと言応援コメントなどをご記入ください。また、手数料不要の払込取扱票をご用意しますので、お申し出いただければ郵送いたします。

（3）クレジットカードによるご寄付

裏表紙のQRコードもしくは当財団ホームページよりお申し込み下さい。

助成応募については、当財団ホームページをご参照ください。

「寄付申込書」「パンフレット」なども、ホームページからダウンロードできます。

＜寄付・助成のお問合せ＞
地域助け合い基金担当

電話：(03)5470-7751 FAX：(03)5470-7755

メール：mail@sawayakazaidan.or.jp

新しい ふれあい社会づくりに 向けて

ふれあい

いきがい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。

特に現在は、全国自治体が新地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりを強力に支援しています。

どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

● 新地域支援事業・助け合いの地域づくり

北から南から 各地の動き

● その他の財団の活動 など

ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・

ご寄付者の皆様のご紹介

さわやか活動日記（抄）





新地域支援事業・

各地の動き

(2021年5月1日～31日)

●全国各地で、

推進の支援をしています

●活動の一部を紹介しています

生活支援コーディネーター・ 協議体と連携

川島町 (埼玉県)

20日／川島町第1層協議体会議が開催され、当財団も協力。協議体メンバーが入れ替わり、あらためて生活支援体制整備事業の認識を統一するため、勉強会も兼ねて開催された。

年度初めのため、今年度の目標と年間のおおよその予定について確認した後、財団から同事業の概要と第1層協議体の役割を事例も交えて説明した。その後、生活支援コーディネーターから、第1層として現場の状況を知るためにも、各委員が担当を持って第2層協議体活動の支援を行ってはどうかと提案があり、他の委員も賛同した。各委員の出身地域等も考慮し、事務局で担当案を示して各地域に生活支援コーディネーターがつかないでいくこととなった。

20日／川島町第2層協議体全体会議が開催され当財団も協力、7地区の第2層協議体リーダーと副リーダーが参加した。月1回行われていた第2層協議体も、コロナ禍により自粛したままとなっている地区、工夫しながら活動を始めている地区、話し合いだけは行っているが活動は自粛している地区と、動きが異なってきた。このため、各地区からリーダーと副リーダーのみ

参加し、情報共有を目的に開催した。

冒頭、生活支援コーディネーターから協議体の開催や活動は各地区の判断に任せることを確認しつつ、一方で高齢者の身体機能の衰えが顕著になってきているとの現状も共有し、コロナ禍でもできる活動の一つとして、屋外での体操教室の例を紹介。また、今年度の第2層協議体の話し合いについては、コロナ禍での不安も大きいことから、第1層協議体でも各委員が地区担当となり運営支援していくことを説明した。その後、各地区の現場の活動状況を共有した。

美里町 (埼玉県)

(岡野)

美里町大沢地区で2回目の第2層協議体が開催され、9名が参加。当財団もオブザーバー参加した。

これまで大づかみ勉強会を3回開催し、アンケートでの希望者を中心に協議体を立ち上げた同地区。1回目は協議体の愛称と目指す地域像を決め、今回は、自己紹介、副リーダー選出の後、

他の自治体の事例を参考に何から活動を始めるか話し合った。同じ埼玉県の新潟市のガールズデニングを介した集いの場の事例を受けて、美里町でも行政から花の支給がある「花いっぱい運動」を活用して誰でも参加型の屋外型居場所を実施し、地域のつながりづくりを生かしてはどうか、との意見に出席者が賛同し、進めることとなった。

次回6月の協議体で最終的な段取りを確認し、7月には活動の総括を行うことになった。コロナ禍でも、ヒントや工夫次第で活動を生み出すことができると感じた。美里町では他地区でも第2層協議体立ち上げが予定されており、軌道に乗るまで継続して支援していきたい。

(岡野)

新潟市(新潟県)

6日/新潟市第1層の連絡会が開催され、第1層生活支援コーディネーター(同市行政区8区から各1名)と戦略会議メンバー(支え合いのしくみづくりアドバイザー河田圭子氏、行政、同

市政策調整監の望月迪洋氏、当財団)が今年度の取り組み推進について議論した。議題は、1・支え合いのしくみづくりの進捗状況について、2・支え合いのしくみづくり推進員に求められる活動について。

1については、新年度となり1層・2層生活支援コーディネーターの異動も多く、体制の状況を共有。また、各区の生活支援コーディネーターから活動状況と今後どのように進めるかについて報告があり共有した。

2では、1を受け、戦略会議メンバーから「生活支援コーディネーターに求められている活動」について気づきや助言を行った。「地域包括ケア推進モデルハウスを核とした茶の間での人と人とのつながりと『お互いさま新潟』等の生活支援、移動支援など必要性は高まっている。手助けを受ける側の立場から」を大事にしたい。2025年まであと数年。原点を確認しながら、面として助け合いを一緒に広げ

ていきたい」(河田氏)、「頑張つて活動しているが、助成金ありきの活動支援、点づくりにならないよう、面として広げるように意識したい」(望月氏)、「全国でいち早く体制をつくって動き出した新潟市。目指す地域像がどこまで実現していて、足りないものは何か。茶の間に来られない人の助け合いを推進しよう」と3年前にスタートした『お互いさま新潟』がどう進んでいるか、戦略を立てているか。住民の声を聞き、住民の力を生かして進めることが大切」(財団)といった意見が出た。

これを受けて、生活支援コーディネーターそれぞれの気づきを共有した。

(鶴山)

生活支援コーディネーター養成研修等に協力

群馬県

24・31日/群馬県で、生活支援コーディネーター養成研修が開催された。当



財団も県の推進協議会メンバーとして毎年企画段階から協力している。この研修は主に新任者に向けた情報提供に加え、グループワークによる実践イメージの共有を目的にした基礎的な内容で構成されている。これは同県で実施する、県内を5ブロックに分けた生活支援コーディネーターを中心とした関係者の連絡会企画との連動を想定している。このように同県では、本事業の推進体制継続に向けた、充実したバックアップ体制が実践されている。

(長瀬)

(本稿は、岡野貴代、鶴山芳子、長瀬純治)

情報紙

助け合いの仕組みづくりをさらに進めよう

『さあ、やろう』 vol.16発行

生活支援コーディネーターと協議体の取り組みを考える情報紙『さあ、やろう』。新地域支援事業に携わり、地域における助け合いの仕組みづくりを進めている方々の参考となる記事を掲載し、全国の関係者の皆さんに頒布しています。また、財団ホームページからもダウンロードできます。

ぜひご活用ください。

【vol.16目次】

- *「いきがい・助け合いサミット in 神奈川」紹介
- *サミットへようこそ～分科会めぐり～ 堀田力
- *さわやか座談会
「コロナ禍の中で生活支援コーディネーターと協議体はどのように活躍しているか」
- *「地域助け合い基金」状況で報告
- *Topics コロナ禍の中でも助け合いを広めるために

【お問合せ】電話 (03) 5470-7751 メール post@sawayakazaidan.or.jp



ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

(敬称略) (2021年5月1日～5月31日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合がありますご了承ください。

さわやかパートナー個人(138件)

(都道府県別50音順)

北海道	岡本 優子	伊藤 壽弘	大山 綱明	タミヤ クニヒロ	天野 武和	福田 昌子	河野 孝子	大西 彰夫
星川 光子	関 順子	大木 貞彦	奥谷 信子	土田 悦子	池田 高志	堀田 宏樹	出川 益江	京都府
宮城県	中村 久美子	坂口 棕治朗	押切 謙徳	永島 崇子	石井 義高	松下 晃久	野村 尚	梶 宏・寿美子
伊藤 寿朗	群馬県	鮫島 収	加嶋 恵美子	新津 ふみ子	岩田 恵美子	松田 守	古川 晴雄	喜利 ミナ子
土肥 強	岡野 光利	本江 威憲	勝 力男	榎本 恵子	大久保 弥	安原 久咲子	岐阜県	坂元 和夫
渡部 孝雄	埼玉県	宮本 和夫	金平 輝子	早水 正子	小沼 幾久雄	吉田 久美子	伊左次 清子	大阪府
福島県	川添 能夫	本吉 正男	河崎 栄一	藤井 良子	桑野 映美	渡部 治夫	高柳 淑子	衛藤 慎吾
阿部 洋子	小峰 貞夫	東京都	五味 朗	前田 隆	後藤 政也	匿名希望	静岡県	大道 直行
茨城県	下川 初江	青柳 邦雄	頃安 健司	升永 英俊	小林 重敬	新潟県	土屋 幸己	児玉 恭教
小松崎 和子	滝口 健次	阿部 まさ子	斉田 国太郎	松友 祐子	古村 照夫	大澤 澄男	愛知県	田中 茂雄
関 正夫	寺島 知子	上田 恭子	清水 敦子	村本 久夫	近藤 弘	須田 恒夫	井浪 典子	中田 壽子
前畑 安宏	土井 猷治	梅田 義夫	城野 東太	望月 明美	佐伯 知美	福井県	大前 直子	人見 滋樹
森下 英子	西島 雅行	太田 喜代子	鈴木 裕	森 妙子	白岩 正明	小野 昭男	河原 朗治	由村 雅司
栃木県	千葉県	大野 恒太郎	谷山 尚	神奈川県	服部 恵津子	有賀 一三	三重県	米田 鶴子
								兵庫県
								岡田 泰信
								中村 順子

久恒 千里	黒木 詔子	角 洋一郎
藤本 幸延	高場 憲夫	大分県
奈良県	香川県	畑 昭子
稲田 禮子	松本 林	鹿児島県
広島県	愛媛県	富永 泰子
今崎 仙也	松原 一紘	沖縄県
角川 克己	福岡県	比嘉 玲子
栗原 捷子	小出 まずる	

さわやかパートナー法人 (12件)

(50音順)

内村物産株式会社
 社会福祉法人五泉市社会福祉協議会
 NPO法人
 さわやか福祉の会流山ユー・アイネット
 株式会社シーエスエス
 一般社団法人全国農業協同組合中央会
 NPO法人鶴ヶ島なごみ
 有限会社ナースケア
 ハート公所つきみ野
 日立金属株式会社
 NPO法人まごころサービス国見センター
 有限会社ヤマダ
 NPO法人ゆいの会

一般ご寄付 (3件)

(50音順)

清水 勇男 (5万円)
 瀬口 卓也 (3千円)
 山下 恵久子 (1万円)

地域助け合い基金ご寄付 (2件)

(ご寄付日付順)

匿名希望 (10万円)
 匿名希望 (1千円)



『さあ、言おう』バックナンバーのご紹介

◎お問い合わせは広報まで 電話：(03) 5470-7751 メール：pr@sawayakazaidan.or.jp



2021年6月号

- 巻頭言「70歳定年で社会は変わるか？」清水 肇子
- 今風女子
北風 宗照さん
- さわやか福祉財団の軌跡
＜寄稿3＞異彩・異才の個性派ぞろい 鶴山 芳子

- 移住 悪くないですよ
新地 草倫さん (長野県佐久市)
- 連載5 老いの暮らしを創る 村田 幸子 ほか



2021年5月号

- 巻頭言「思恩忌」春
清水 肇子
- 厨房男子
中村 安宏さん
- さわやか福祉財団の軌跡
＜寄稿2＞
清水さんのこと 丹 直秀

- 移住 悪くないですよ
阿部 幹司さん・幸子さん (宮城県栗原市)
- 連載4 老いの暮らしを創る 村田 幸子 ほか

さわやか活動日記(抄)

〈2021年5月1日～5月31日〉

社会参加推進事業

社会人地域参加推進プロジェクト

高連協役員会を開催

【5月18日】

高齢社会NPO連携協議会（高連協）の役員会をウェブ会議形式で開催。NPO法人高齢社会をよくする女性の会理事長樋口恵子氏と当財団会長堀田力両共同代表参加の下、8

名の理事と監事、事務局の計12名が出席した（欠席者はいずれも委任状提出）。

議題は、来る6月24日開催予定の総会に向けて、①2020年度事業報告の件、②20年度決算承認の件、③21年度事業計画の「政策提言及びそのための調査事業」で提案されている3件の研究提言事業（①「高齢社会の雇用を含めた社会参加」



に関する研究提言事業②「助け合いによる社会参加」に関する研究提言事業 ③「厳しい社会情勢（財政難、人材難）の研究を見据えた上で、高齢者に対するケアをどう持続維持していくか」に関する研究提言事業」の研究提言の進め方について、両代表と全理事で意見交換を行い、方向性を共有した。しっかりと推進していきたい。

（玉置）

情報・調査事業

調査政策提言プロジェクト

「広がれ

ボランティアの輪」

連絡会議幹事会開催

【5月25日】

「広がれボランティアの輪」連絡会議幹事会がオンラインにより開催され、2020年度事業報告（案）・決算および21年度事業計画（案）・予算（案）について協議した。

共通理念を達成するための事業・活動の柱としての4つの項目を、昨年度に引き続き今年度も実施することが了承された。①with

コロナ、afterコロナを展望した実践共有、②構成団体の協働関係の構築及び協働による取り組みの強化、③ボランティア・市民活動の推進のためのプラットフォームづくり、④ボランティア・市民活動に関する情報発信機能の強化。また、今年度はボランティア全国フォーラムを10月30・31日に開催予定。内容、開催方法については今後検討していく。

なお、当財団もメンバーとして関わる勉強会プロジェクトチームでは、今年度は省庁懇談会の企画を担当することとなった。また、従前から担当している「広がれ」構成団体同

事務所 だより

●「いきがい・助け合いサミット in 神奈川」のポスター・出展も締め切りとなり、8月からの閲覧に向け、鋭意準備中。ご期待ください！そして、サミット開催まで、あと2か月弱となりました。締め切りは7月31日。オンラインでのご参加もできますので、お申し込みお待ちしております。

士の情報交換とともに、ボランティア・市民活動推進団体等の学びにつながる勉強会についても、年明け開催に向けて準備を進めていく。さらに、コロナ禍においても地域におけるつながりを絶やさないことを目指し、昨年5月に全国11団体が主催し設立された「未来の豊かなつながり」のための全国アクション」



（「広がれ」および当財団も主唱団体）でも、コロナ禍での全国の取り組みの工夫等を情報発信していく。（上田）

9月開催のいきがい・助け合いサミット in 神奈川にお役立てください

いきがい・助け合いサミット in 大阪 『助け合い大全'19』

2019年9月に開催した「いきがい・助け合いサミット in 大阪」のすべてを収録した『助け合い大全'19』です。

サミットでの全体シンポジウムと各分科会における発言要旨をまとめた『パネル編』、ポスターセッション出展の全作品を掲載した『ポスター編』、そして『提言編』を3冊セットで頒布しています。9月1・2日開催の「いきがい・助け合いサミット in 神奈川」の参考資料としてもご活用ください。

お申し込みは当財団まで → mail@sawayakazaidan.or.jp

1セット2,000円（税込み）送料別途 ※3冊セットのみでの頒布となります。

【助け合い大全'19 提言編 目次】

- いきがい・助け合いサミット in 大阪の意義と特徴
- 全体シンポジウム発言要旨
- 分科会1～54
提言／登壇者／議事要旨
- ポスター展
- いきがい・助け合いサミット in 大阪を振り返って



ポスター編

提言編

パネル編

みんなの広場



定年退職後のこと

テーさん 81歳

兵庫県

6月号の巻頭言「70歳定年で社会は変わるか？」を読んで、私が70歳の時はどうだったかを思い返しました。

私が企業に入社したときは55歳定年でしたが、退職時には60歳になっていました。しかし、私が58歳になった時に早期退職が勧められて、58歳で退職すれば特別退職金がもらえるということ、退職しました。退職しても特にやることはないため、大阪で友人がやっている事務所を借りて、ほぼ毎日大阪まで出かけ、在職中に取得した資格を活かして中小企業の顧問や専門学校講師などを引き受けていました。

投稿募集

『さあ、言おう』は皆様の声を社会につなげる問題提起型情報誌です。
ぜひ皆様の声をお寄せください。

〒105-0011 東京都港区芝公園
2-6-8 日本女子会館7階
公益財団法人さわやか福祉財団
『さあ、言おう』編集部宛
FAX: (03) 5470-7755
E-mail: pr@sawayakazaidan.or.jp

送
付
先


素晴らしい判断力を今後も存分に生かしてください

しかし、70歳を越えてからはそのような仕事もなくなり、私より年下の知人からは、「自分の仕事がなくなるから、あまり頑張らないで…」と言われたことが耳に残っています。70歳以降は、記憶力、体力とも衰え、無理がきかなくなったことが残念です。



私たちはふれあいあふれた地域づくりを支援しています

さわやか福祉財団の活動をぜひご支援ください。

『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人
年会費

法人
年会費
(1口)

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の控除対象となります。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の控除対象となります（所得税の寄付控除額の上限は所得の40%－2000円）。

一般ご寄付を
いただく場合の
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856※

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

※手数料不要の専用用紙をご用意していますのでお申し出いただければご郵送します。

*いずれもお問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。(mail@sawayakazaidan.or.jp)

表紙絵に

はり絵・池田げんえい



「七夕」

編集後記 ●「厨房男子」は86歳の元国鉄マン。暇をもてあます時間はありません（P4～）。●「真っ直ぐに、30年」、さわやかインストラクターの方々や時間通貨について振り返りました（P11～）。●「活動の現場から」は宮城県大河原町「ほっとあい」。助け合いの原点を教えてくださいました（P20～）。●「移住 悪くないですよ」は、伝統ある美濃和紙を継承する寺田さんです（P31～）。●村田幸子さんの「老いの暮らしを創る」、早めの引っ越しのその後です（P36～）。●皆様のご寄付が、地域に役立っています（P26～、裏表紙）。

助け合いを
広げよう!

新
ひとりごと

村松
泰子



●公益財団法人日本女性学習財団理事長
大学教員時代は、教育やメディアとジェンダーについて研究していました。財団は、男女共同参画社会をめざした生涯学習や次世代育成事業を行っています。

日本には、男と女は違うから役割が違って当然
という意識が根強くあります。

人として大部分は同じなのに男女をことさら区別する意識は、
実は学校でも日々培われています。

昨年、コロナ禍による一斉休校が終わった当初、
男女別の分散登校とした学校があったと聞きます。

日頃から名簿をはじめ男女別の慣行があると、こうなるのでしょう。

ひとりひとりの子どもを

性別以外にもさまざまな個性をもった存在として見つめたいものです。

7月号

通巻335号 2021年7月10日発行
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい
イラスト すずきひさこ
福島康子

レイアウト 菊池ゆかり

印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子
発行元 公益財団法人さわか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp
<https://www.sawayakazaidan.or.jp>
Printed in Japan

無断複写・無断転載はご遠慮ください©

あなたの気持ちを助け合いの力に活かしませんか？

「地域助け合い基金」で

コロナ禍を乗り越えて共生社会へ

こんなふうに
役立っています！
皆様のご寄付



コロナに負けず
助け合い活動スタート

新潟県
佐渡市

助け合う地域
を目指し、外出支援、
部屋の掃除等の有償ボ
ランティア活動を開始

ボランティア活動保険
加入費用、消耗品費等
を助成



鳥取県
米子市

集いの場を
立ち上げ

使われなくなった老人憩い
の家を再活用し、住民が集
いの場を新たに立ち上げ

机・いす、体温計、コーヒーマーカー、
事務用品購入等を助成



京都市
京都市

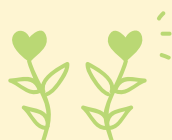
活動を屋内から屋外へ

コロナ禍で認知症カフェから
農園プロジェクトへ。
多様な人たちの交流拠点に発展
畑の賃借料、苗・農具購入費等を助成

ご支援、ご寄付を
どうぞよろしくお願いします。

※詳細は、本文38ページをご参照ください。

財団ホームページ内
基金関連ページ



公益財団法人

さわやか福祉財団